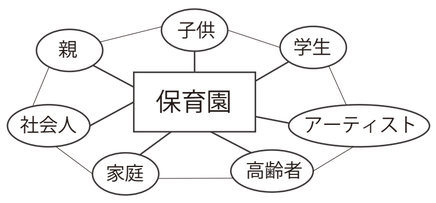
郊外空洞化住宅地の斜面をつなぐ保育と交流の拠点

都市デザイン研究室 cy14040 吉濱美砂
主査　前田英寿　　副査　藤原紀沙

01 研究背景

小学校以降と比べて幼児期の教育は遊びや交流が中心であるが、現代の子どもは同世代や保育士とか接触していない。安心安全を考慮するあまり、保育施設はまちに対して閉ざされる傾向にあり、地域コミュニティも希薄になってきている。郊外住宅地で始まっている空洞化と高齢化は、子育ての観点に立つと、家族用住宅が多く建つことや自然環境に加えて、経験豊かなお年寄りが身近にいることは恵まれた条件と言える。首都圏郊外の戸建住宅地を取り上げ、子どもが高齢者との交流を中心として地域と一体になって育つことができる空間を計画する。

02 プログラム



保育園と公共施設・高齢者用住宅を同敷地内に併設し、子どもの活動とまちの人々の活動が混ざり合うような多世代交流拠点を提案する。保育園と地域の共有空間を意図的につくり、訪れた人々と子どもたちは物理的・心理的につながることが可能となる。
また、公共施設から音楽・芸術などの文化を発信し、文化を通して間接的にもまちの人々との関わりを持たせるとともに、子どもの情操教育の発展の場となるよう計画した。

地域的アプローチ

少子高齢化が顕著な地域の活力維持やコミュニティ形成を促し
後に子育て世代や若い世代の人口流入を図る
↓
まちの魅力創造につなげる

保育的アプローチ

多様な人々や自然と関わりを持てる場をつくる
音楽・芸術などの文化に触れさせる
↓
情操教育を活発にし、感性を豊かにする

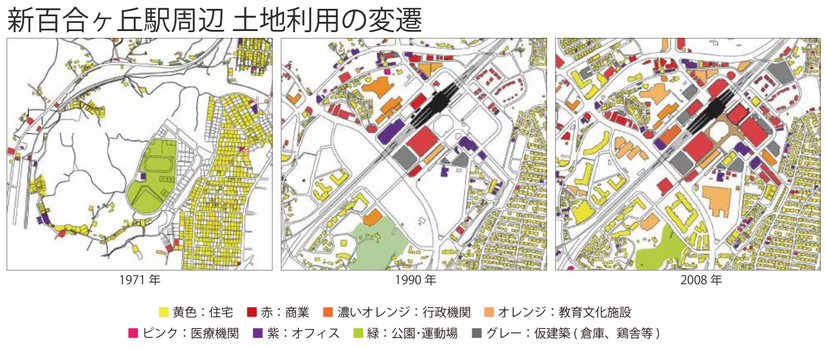
計画方針

①少子高齢化が顕著な空洞化した地域に、子どもが中心の交流施設をつくることでまちの魅力創造と地域の活性化を図る。
②敷地周辺にある公園緑地は手入れが行き届いておらず子供が遊ぶ屋外空間が少ない。丘の地形を生かした公園緑地として再生する。
③新百合ヶ丘駅周辺には多くの芸術・文化関係者が居住し、昭和音楽大学・日本映画大学などの教育機関が隣接している。
「しんゆり・芸術のまち」としての地域ブランドを促進するような文化・芸術の要素を子供の情操教育に取り入れる。

03 対象敷地

川崎市の副都心として栄えた新百合ヶ丘駅周辺の住宅地に着目した。この地域は 1960 年入居開始の「百合丘団地」の開発を契機に開発され、宅地化が進んだ。

新百合ヶ丘駅周辺 土地利用の変遷

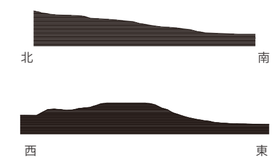


新百合ヶ丘駅から約 1.3km の「東百合丘４丁目緑地」を対象敷地とする。周辺は 1969 年頃から開発が始まり、計画的戸建住宅・一般戸建住宅・共同住宅が混在する・不整形な敷地も多く見られ、土地の高低差が大きい地域である。ほとんどの住宅が傾斜地に建つため、体の弱い高齢者にとっては暮らしにくい環境と言える。東百合丘４丁目は年少人口の流入がほとんどなく、高齢化率も著しい。

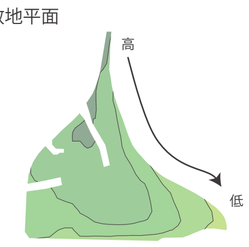
東百合丘４丁目緑地

北西から南東にかけて下り傾斜
中心が平場になっている
約 18mの高低差
木が無造作に生えているせいで薄暗く、見晴らしが良くない

敷地断面



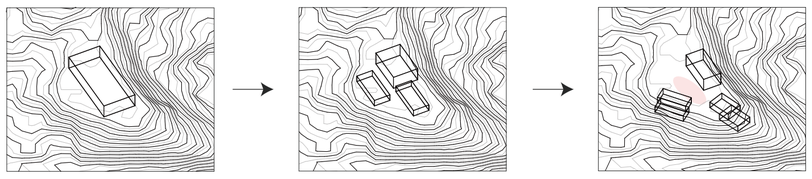
敷地平面



04 設計計画

施設計画

傾斜地の形状を尊重した分棟配置とし、保育園棟・住宅棟・公民館棟・食堂の４棟で構成した。
中央の平 場をオープンスペースとして各棟を結ぶ中心の広場とし た。



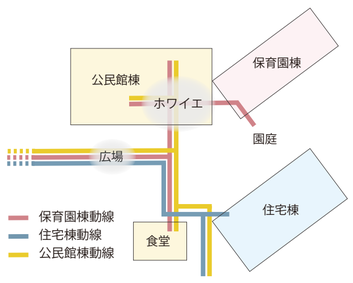
丘の上の複合施設　→　用途別に分棟配置　→　中心を開き、地形に沿わせる

動線計画

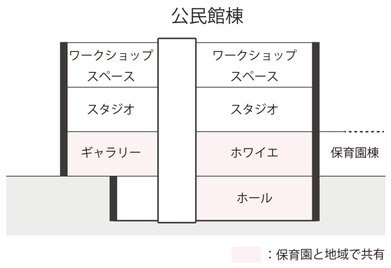
公民館棟のホワイエを中心に、各棟をそれぞれ行き来する人同士の動線を部分的に混ぜたり、施設を共有することで直接的・間接的に関わりを生む。

共有する施設の例

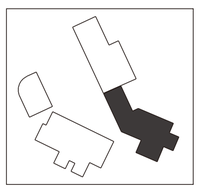
ホワイエ　　｜保育園棟と公民館棟で共有
多目的ホール｜保育園と一般の人々で共有
ギャラリー　｜多世代・多人種の作品を飾る



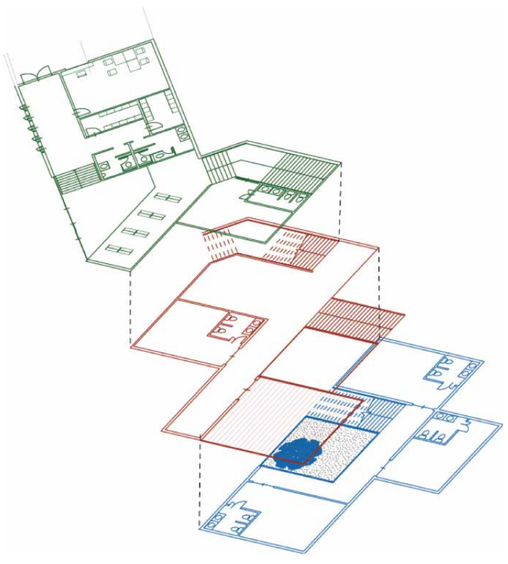
公民館棟

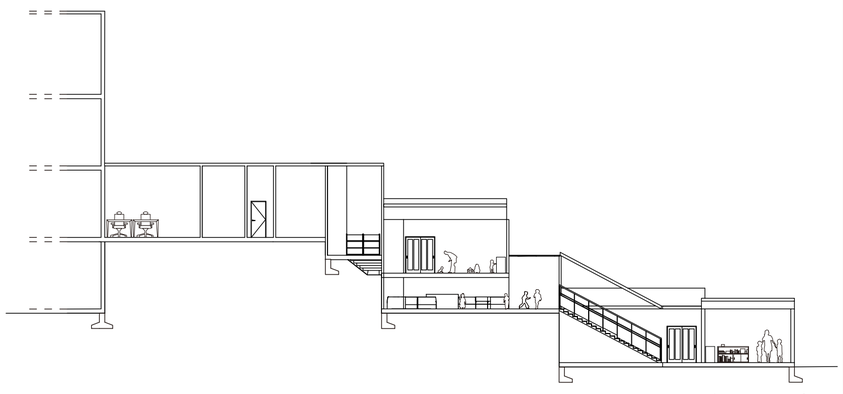


保育園棟　延床面積　00 ㎡

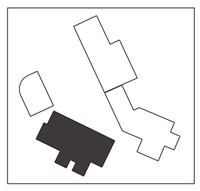


1 階の公民館棟からアクセスし、地下 1 階、地下 2 階へと降りていく構成とした。南側のテラスや地下 1 階と地下 2 階をつなぐ中庭など、外部と積極的に触れることができる空間を取り入れた。

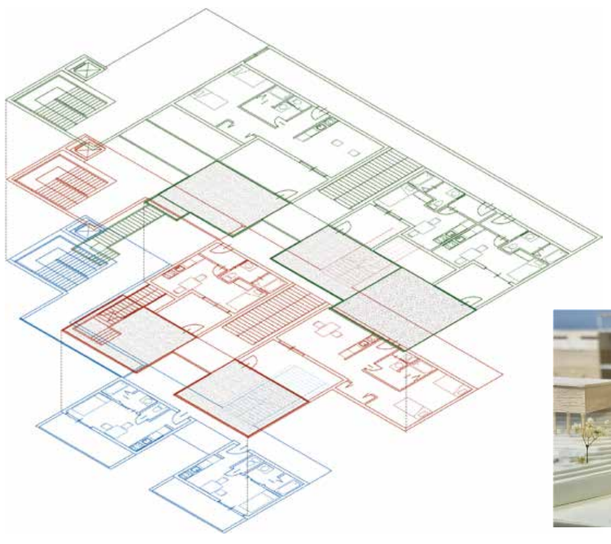


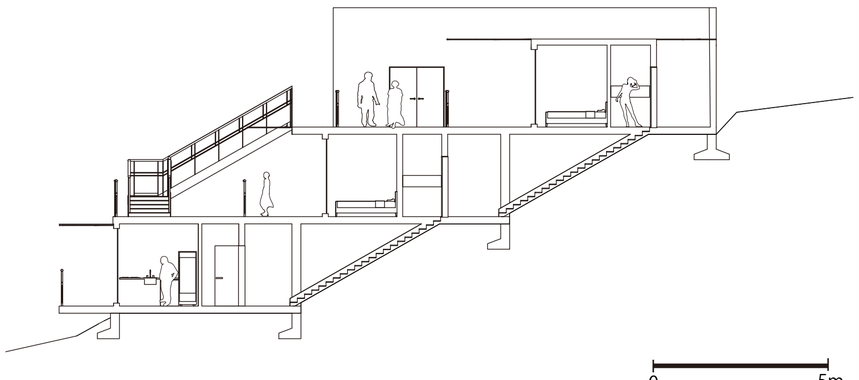


住宅棟　延床面積　00 ㎡

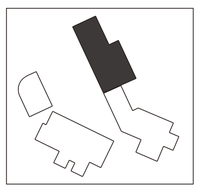


全７戸からなる高齢者用の集合住宅。単身者用と２人用の２種類の住居を取り入れた。南側斜面を生かし階段状のガーデンテラスとし、居住者同士の交流の場とした。階の行き来は居住者専用の中央階段と、一般の人々と共用の階段室を設けた。

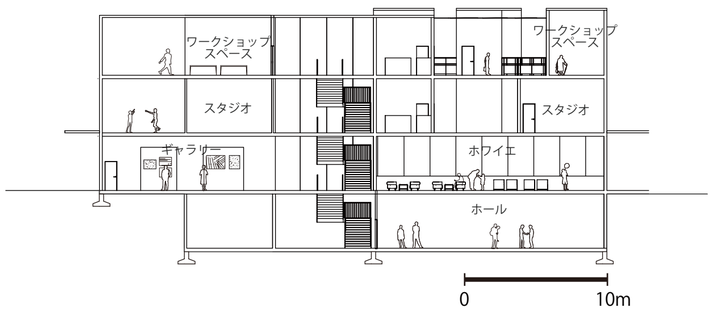


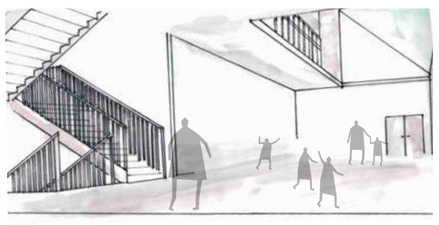


公民館棟　延床面積　00 ㎡

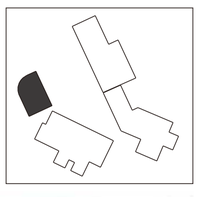


１階に施設の中心となるホワイエとギャラリー、２階と３階に音楽スタジオや様々な用途で利用できるワークショップスペース、地下１階に保育園と共有する多目的ホールを設けた。
高齢者や周辺住民・学生が趣味の場として利用し、交流の幅を広げる。





食堂　延床面積　00 ㎡



朝は高齢者の集いの場、平日の昼間は保育園に通う子どものランチスペース、夜は近隣の小中学生が利用できる子ども食堂、休日はカフェとして利用するなど、曜日や時間によって職を通して様々な顔を持つ空間とした。